

十月興行

鳥次



二の巻
標下

豊竹古親大夫
相勤申條

人形浄瑠璃

鳥次

味橋の波

楽交

大和運動



人の和で築け明るい
大東亞

十月一日より七日まで

總親和週間

松竹株式會社
千日土地建物株式會社
新興演藝株式會社

乍憚口上

皇國日本の誇りはいま大東亜全域に輝きわたつて國威の有難さを唯今皆様と共に仰ぐ次第に御座候然るところ古典藝術の本城たる當座の使命は益々重く茲に十月興行を迎へて一段の飛躍を試み當座櫓下豊竹古靱太夫は職域奉公の一念に燃え此度初役をもつて大曲を勤むること、相成り又鶴澤觀西翁は藝道精進の意氣物凄く高齡を以て五十一年振りに相勤め可申尙又永らく御引立を蒙り居候野澤吉左儀此度初代野澤松之輔と名乗り一層の奮勵を致すこと、相成申候次第にて當興行に於ては更にお珍らしき狂言ばかりを選定して御期待に添ふこと、相成申候間何卒いづくにも倍して御眞御引立の程を偏に奉御願申上候

昭和十七年十月一日

四ツ橋畔

文樂座 敬白

昭和十七年十月一日初日

初日 午後 三時開演
毎日午後 三時半開演

・御觀覽料・

一等席 御一名 金三圓五十錢
(一階座席三十錢上り)
 二等席 御一名 金一圓五十錢
 三等席 御一名 金六 十 錢
(各等入場税別)

一等御座席 是五日前より
 一等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南⑦四七壹番
 專用電話 南⑦三〇三番
 一般御用 南⑦三七八番
 の電話

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ますから御便利で御座ります。

すまひ願へ部傳宣座樂文は向の望希載掲御告廣トツカへ誌本

行 興 · 月 十

人 形 淨 瑠 璃

演出總形人・線味三・夫太

日 初 日 一 月 十

演 開 時 三 後 午 日 初
演 開 半 時 三 後 午 日 毎

第一 お七 伊達娘戀緋鹿子

八百屋内の段より
火見櫓の段まで

第二 新 作 出 陣

西亭作詞作曲 棋茂郡陸平振付
食満南北衣裳考案

一 幕

第三 傾城阿波の鳴戸

十郎兵衛住家の段

第四 本 朝 廿 四 孝

狐十種香の段より
火の段まで

第五 卅 三 間 堂 棟 由 來

平太郎住家の段より
木遣り音頭の段まで

西亭作詞作曲 榎茂都陸平振付

陣出 新 作

幕

豊	豊	野	野	野	豊	白	白	白	豊
澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤
鎮	仙	橘	友	季	友	季	友	季	友
八	系	友	季	友	季	友	季	友	季

人秋後割

志田 芳太郎

志田 芳太郎

志田 芳太郎

志田 芳太郎

(床本) 出陣

今ぞ秋得し出陣の、今ぞ秋得し出陣の、壽永の秋の嬉しきよ。されば保元も夢の跡、雨露に幾年木曾木立、今日ぞ錦の晴衣、これは清和源氏の嫡流、木曾冠者義仲にて候、さても平家の一族、月に浮かれ花に戯れ、奢侈専横に四海亂れ、我意暴戻に宸襟を御惱し奉る事、沙汰の限りにあるべき所畏くも今度、逆徒追討の令旨を賜りて候、さらば疾く出陣致して、叡慮を安んじ奉らばやと存じ候。

如何に義仲が郎黨やある、まかり御前に候。一議もあるべき候程に、巴にこれへと申し候へ。仰せかしこまつて候。如何に巴殿御大將の御召し候、とく是へ御參り候へ。木曾山おろし烈しくて、木曾山嵐烈しくて秋の野分の身にしむも、君が恵みの温かき猛き、勇婦も情けにはなびく心の糸すゝき、招く尾花に誘はれて、御前に木曾の女郎花。御召しによりて侍り候。これは巴候か、今こゝに申すること候、我れこの度令旨を賜り候上は、急ぎ出陣あるべく候、生死不明は戦場の常、さる間おことに、幼時の一子義高を育て、後日の備へ怠りなく、留守

居厳しく相守り候べし。仰せかしこみ候へども、そは情けなき御事にて候、義高君の御身、妹山吹に頼み置き候上は、夢氣づかひ候はず、この度の御義、一期の大事、なか／＼の御事ならず、一手一指もあだならざるの御時也。たとへ女の身なるとも、軍に立つは君への忠、武門の譽れ、國を鎮めの御戦に男女の候べき、それ日の本の女性として、申すも長き御極み、その往昔の神后の後、妙なる御身に御劍を佩き、異夷鎮めの御舟出尊き英姿に敵もなし、誰れかおそれかしこまん、ましてや賤の、み民草心一すじ苧環のつながる糸のおみなえし、身は君恩に捨小舟、命は義による理りぞ、我が日の本の教へなれ是非に馬側の御供に、侍らせ給ひ候へかし。實に理りの事にて候、さらば山吹御前に後事を託し、出陣の供さし許すべし。こは有難き御言葉、過分の譽れ、この上や候べき。さらば先づ門出に八百武神に祈誓をなし、逆徒鎮護の御拜せん。實に／＼それよ傳え聞く、人皇五十有一代時の帝の宣旨を受け、かの古への田村鷹、東夷鈴鹿の悪靈惡鬼、討鎮めんと御門出に、觀音薩埵を祈らせて、普天の下卒土の中、いづく皇土にあらざるや、皇威に背

く逆徒ばら、鎮め給へと祈願ある。軍を進めて東國や、轉々伊勢路の悪鬼共、その時田村將軍は、其の時田村將軍は、無勢を以つて鬼神が中、無二無三に割つて入り、八面六びの勢に、悪鬼忽ち亡びけり。人間業にあらざりし、神の御業に外ならず、神の御業に外ならず。これぞ八洲の軍神、これぞ誠の神の國。御加護の程ぞかしこれれ、御加護の程ぞ尊けれ。いざ／＼故智に我れもまた、尊き令旨を畏みて、今出陣の門出に、祈り拜せん萬神、祈り拜せんよろづ神。

それ天地の開けしより、國常立の御尊立たせ給ひて天ツ神七代の後の大神は、申すもおそれ、天照す恵みも高き日の本の、國は千代までゆるぎなき、悪鬼悪靈、異夷原、鎮護退散、四海波靜かに神の御聲振る、實に神さぶる神樂舞、實に神さぶる神樂舞。

巴は仰せ畿りて、巴は仰せ畿りて、はや出陣の晴れ戦さ、去る程に、扱も其後義仲兵信濃を出でさせ給ひしは秋も仲空穗すゝきの、なびく勢ひの二萬餘騎、義を泰山の兵等、轡並べて攻め上る、其の時平家の軍陣は、曾子

維盛惣大將、それに隨ふ十餘萬、たとへ幾百千萬とて、枯野の芒にことならず、何條恐れ申さんや、我れに正しき士道あり。義を一元の合戦に、神も力を添へぬべし、戦は我れに勝開の、えい／＼應の陣聲は、礪波の山にこたまして、木曾に名を得し四天王、一騎當千の勢は、秋のすゝきを薙ぐがごと、すさまじきともすさまじき、さて俱利伽羅の火牛の計、谷へおちこち敵の軍、哀れ木の葉の木曾嵐、我れも初陣と木曾駒の、栗毛のひづめ、か／＼／＼、是は木曾にて女武者、巴が晴れの出陣なり君の御爲に散る命、何惜しからぬ紅葉ばの、手折れや討てや人々よ、聲によせ來る諸軍勢、もとより好む長刀を柄長にしかと追とりのべ、右よ左りよ前後、二つ巴や三つ巴、まんじ巴と戦ひける、一息ふつとつく鐘の、折りしも壽永秋の暮れ、桔梗かるかや女郎花、千草すだく虫の音の、りん／＼きり／＼、松虫きどす、聲は夜風に冥々たり、亡き兵を弔ひの我が武士道の情けには、敵も味方もおしなべて、松の恵みの下雫、松の恵みの下雫、皇が御徳のうるほふまで、いざ／＼征かん、いざ征かん、勝つて兜の緒をしめて、勝つて兜の緒をしめて。